

## 看護学生の生命観に関する調査報告（第三報） — 入学時の脳死と臓器移植に対する考え方 —

川崎医療短期大学 第一看護科 第二看護科\*

關戸 啓子 初鹿真由美 渡邊ふみ子 太湯 好子  
杉田 明子 吉田 和代\* 酒井 恒美

(平成4年8月24日受理)

### An Investigative Report on Nursing Students' Views about Life (Part 3) — Views about Brain Death and Organ Transplant at their Admission —

Keiko SEKIDO, Mayumi HATSUSHIKA, Fumiko WATANABE  
Yoshiko FUTOUYU, Akiko SUGITA, Kazuyo YOSHIDA  
and Tsunemi SAKAI

*Department of Nursing  
Kawasaki College of Allied Health Professions  
Kurashiki, Okayama 701-01, Japan  
(Received on Aug. 24, 1992)*

**Key words** : 看護学生, バイオエシックス, 生命観, 脳死, 臓器移植

#### 概 要

入学して間もない本学の第一看護科と第二看護科1年生に「脳死と臓器移植」に対する認識とその形成に寄与する諸要因を把握するために、アンケート調査を行った。その結果、脳死は約半数の学生が肯定的立場をとり、その理由は生き返らないのなら臓器を提供して苦しんでいる人の役に立てたいとするものが多かった。脳死者からの臓器移植は約2/3の学生が肯定的立場をとり、その理由は患者を助けたいとするものが多かった。脳死の認識に寄与する要因としては4項目があげられ、なかでも「迷信に常に批判的」は「脳死を死と認める」立場に、「友人、知人の死の瞬間に遭遇した体験がある」は「脳死を死と認めない」立場に強く寄与していた。臓器移植の賛否に寄与する要因としては7項目があげられ、「信仰する宗教がある」は「臓器移植反対」の立場に強く寄与していた。さらに「脳死を死と認める」は「臓器移植賛成」の立場に、「脳死を死と認めない」は「臓器移植反対」の立場に特に強く寄与する要因となっていた。

#### I. はじめに

医療の進歩はとどまることを知らず、かつては助かる見込みのなかった患者の命を救うことができるようになってきた。反面、代理出産や遺伝子治療等バイオエシックスの視点から先端医療の問題点がうきぼりになり、社会的にも論議をよんでいる。医療従事者、なかでも患者・家族と一番密接な関わりを持つ看護婦にとっては、避けて通れない問題である。これは、看護

婦を目指す看護学生にとっても同じであり、学生時代から生命観を養っておくことが必要であると思われる。このため、過去2回にわたって、看護学生の生命観に関する調査結果を報告した<sup>1)2)</sup>が、本年1月に臨時脳死及び臓器移植調査会最終答申（以下、脳死臨調答申と略す）が出されたことを踏まえ、改めて今回入学直後の看護学生を対象に、「脳死と臓器移植」の問題に焦点を当て調査した。また、「脳死と臓器移植」に対する意思決定の基になった理由や、この意見

形成に寄与している諸要因を検討し、若干の知見が得られたので報告する。

## II. 研究方法

### 1. 調査対象と調査時期

川崎医療短期大学第一看護科1年生(以下1Nと略す)59人,第二看護科1年生(以下2Nと略す)58人,合計117人を対象として1992年4月に調査を行った。

### 2. 調査方法

質問紙法により,各クラスごとに配布してその場で回収した。回収率は100%であった。

### 3. 調査結果の解析方法

比率の差の検定には,フィッシャーの直接確率計算法を用いた。諸要因の寄与の検討には,数量化理論第II類<sup>3)</sup>を適用した。

## III. 結果および考察

### 1. 脳死に関する認識

まず,脳死臨調答申の理解についてみると,1N,2Nとも「よく理解している」は0%で,「だいたい理解している」は1N33.9%,2N36.2%であった。1Nと2Nの間には有意の差はみられなかった(図1)。脳死臨調の答申は,社会的にも注目を集めた内容であり,アンケートも答申が出されて間もない時期に実施したので,理解は高いと予想されたが,理解している学生は約1/3に過ぎなかった。学生はマスメディアを通しての時局的情報に関心が薄いことをうかがわせたもので,教育に当たってこのような情報を与える配慮の必要性が感じられる。

脳死を人の死と認めるか否かについては「認める」「どちらかという」と肯定的立場をとる学生が1N55.9%,2N46.5%,「どちら

ともいえない」と保留の立場をとる学生が1N32.2%,2N37.9%,「どちらかという」と認めない」「認めない」と否定的立場をとる学生が1N11.9%,2N15.5%で,1Nと2Nでのそれらの率に有意の差は認められなかった(図2)。1992年1月山陽新聞社が行った調査<sup>4)</sup>によると,一般人では「脳死」について32.5%の人が容認し,8.7%の人が認めないという結果であった。金阪ら<sup>5)</sup>は,青少年は大人より医療の進歩をより肯定的に受けとめ,さらに医療系の学生は脳死・臓器移植について一般の大学生に比べ先進的な態度を示すと報告している。今回の看護学生では約半数の者が肯定的立場をとっており,上記の報告と符合する。

脳死に関する認識について,それぞれの立場ごとにその理由を質問した結果は表1のとおりである。肯定的立場をとる学生では「生き返らないのなら,せめて臓器を提供して苦しんでいる人の役に立てたほうが良いと思うから」が一番多く,脳死と臓器移植は切り離して考えることは難しいと思われる。次に多い理由は「器械をつけてまで生きるのは不自然だから」で,器械をつけた姿をみじめと受け止め,視点が患者の生命の質に向けられていると思われる。否定的立場をとった学生は少ないが,その理由は「脳死といわれても,心臓が動き,身体が温かいので死んでいるとは思えないから」が一番多く,患者・家族側に立っての回答のように思われる。逆に医療従事者側に立った回答である「脳死の判定方法が確立されていないから」の理由をあげた者もみられた。一方,保留の立場をとる学生では「脳死を認める立場も,認めない立場も,両方理解できるから」が1N,2Nの会計で30.8%と特に多く,この問題の割り切れない難しさ

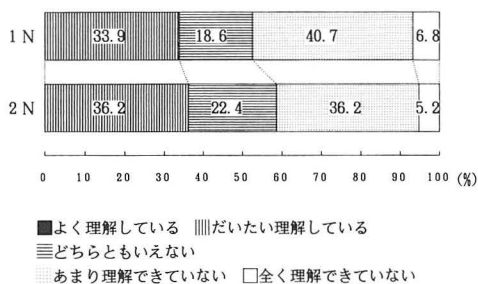


図1 脳死臨調答申の理解

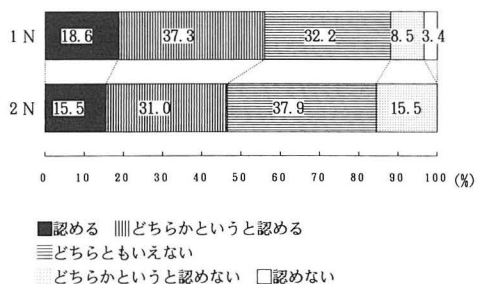


図2 脳死を人の死と認めるか否か

表1 脳死を人の死と認めるか否かの理由

認否	理由	1Nと2Nの合計
認める・どちらかという と認める	生き返らないのなら、せめて臓器を提供して苦しんでいる人の役に立てたほうが良いと思うから	41人 (35.0%)
	器械をつけてまで生きるのは不自然だから	30人 (25.6%)
	器械を外せば生きていけないから	25人 (21.4%)
	脳死は、もはや元にはかえらないから	20人 (17.1%)
	脳死は、人間としての尊厳はすでに失われているから	12人 (10.3%)
	経済的負担が大きいから	12人 (10.3%)
	外国ではすでに認めている所が多いから	6人 (5.1%)
	医療費の増大につながるから	2人 (1.7%)
	その他	6人 (5.1%)
どちらともいえない	脳死を認める立場も、認めない立場も、両方理解できるから	36人 (30.8%)
	脳死について、勉強段階であり、考えが決まっていないから	15人 (12.8%)
	脳死について、よくわからないから	4人 (3.4%)
	考えたことがないから	0人 (0.0%)
	興味がないから	0人 (0.0%)
	その他	4人 (3.4%)
認めない・どちらかという と認めない	脳死といわれても、心臓が動き、身体が温かいので死んでいるとは思えないから	11人 (9.4%)
	脳死の判定が正確に行われるとは限らないから	8人 (6.8%)
	脳死の判定方法が確立されていないから	7人 (6.0%)
	どんな状態でも最期まで望みを持って医療を続けるべきだと思うから	5人 (4.3%)
	手を動かしたり、刺激に反応があるから	5人 (4.3%)
	心臓が日本で昔から行われてきた死の判定方法だから	3人 (2.6%)
	脳死でも、まだ回復の可能性は残されているから	1人 (0.9%)
	脳死は臓器移植につながるから	0人 (0.0%)
	その他	0人 (0.0%)

注 複数回答あり

を現す結果となった。

## 2. 臓器移植の賛否

脳死者からの臓器移植の賛否について、「賛成」「どちらかという」と肯定的立場をとる学生が1N62.7%、2N67.3%で、約2/3に達した。「どちらともいえない」と保留の立場をとる学生が1N32.2%、2N25.9%、「どちらかという」と反対」と否定的立場をとる学生が1N5.1%、2N6.9%であった(図3)。1Nと2Nで

表2 脳死者からの臓器移植の賛否の理由

賛否	理由	1Nと2Nの合計
賛成・どちらか という と賛成	臓器移植を切実に待っている人がいるので、早く対応してあげたい	43人 (36.8%)
	脳死者は生き返らないのだから、苦しんでいる人を助けるために臓器移植は良いと思う	40人 (34.2%)
	外国で脳死者からの臓器移植を受けた人の元気な様子を見ると、臓器移植は治療として必要だと思う	36人 (30.8%)
	脳死者は生き返らないのだから、臓器だけでも他人の身体のみかで生きていて欲しい	34人 (29.1%)
	外国で脳死者からの臓器移植を受けられる人もいるので、日本で実施できたほうが良い	10人 (8.5%)
	外国で許可されている事が日本でできないのはおかしいから	3人 (2.6%)
	時代の流れだから	3人 (2.6%)
	経済的に日本で臓器移植を受けた方が楽だから	2人 (1.7%)
	脳死者からの臓器移植が実施されないと、生体間の臓器移植が行われるから	1人 (0.9%)
	その他	6人 (5.1%)
どちらともいえない	臓器移植を認める立場も、認めない立場も、両方理解できるから	28人 (23.9%)
	臓器移植について、勉強段階であり、考えが決まっていないから	6人 (5.1%)
	臓器移植について、よくわからないから	1人 (0.9%)
	考えたことがないから	0人 (0.0%)
	興味がないから	0人 (0.0%)
	その他	3人 (2.6%)
反対・どちらか という と反対	脳死を死と認めないから	3人 (2.6%)
	臓器移植は、人間を器械とみることにつながる(部分の取り替え)から	2人 (1.7%)
	臓器提供のための脳死患者として見たくないから	2人 (1.7%)
	移植後合併症で困るから	2人 (1.7%)
	臓器も身体の一部なので死後であっても取り出さたくないから	1人 (0.9%)
	巨額の費用がかかり、金持ちだけが得をすることになるから	1人 (0.9%)
	成功率が低いから	1人 (0.9%)
	社会的合意が得られていないから	1人 (0.9%)
	他人の臓器をもらってまで生きるのは不自然だから	0人 (0.0%)
	日本人の宗教感になじまないと思うから	0人 (0.0%)
脳死者の身体を傷つけないから	0人 (0.0%)	
その他	2人 (1.7%)	

注 複数回答あり

のそれらの率には有意の差は認められなかった。それぞれの立場ごとにその理由を質問した結

果は表2のとおりである。肯定的立場をとった学生での上位3つの理由は、いずれも「臓器移植によって患者を助けたい」とするものである。これは、臓器移植賛成派としては当然の理由であるが、一方で、臓器提供者となる患者のことをどのように考えているのかが危惧された。特に、「脳死者は生き返らないのだから、苦しんでいる人を助けるために臓器移植は良いと思う」の理由をあげた学生は、現に苦しんでいる患者に視点がいき、臓器提供者となる患者にまで思いが届いていないと考えられる。なお、「その他」の理由として多様な意見がみられたが、患者の現実の姿に目が向い、割り切れない気持ちが強くはたらいっているようである。否定的立場をとった学生は1割にも満たなかった。その理由は、

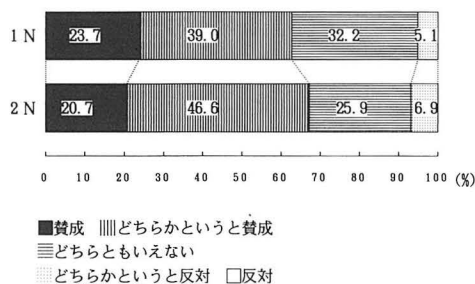


図3 脳死者からの臓器移植の賛否

表3 要因とカテゴリーおよびカテゴリー別人数

要 因	カ テ ゴ リー	人数
I-1: 信 仰	C-1: 信仰する宗教がある	13
	C-2: 信仰する宗教はないが来世を信じる	76
	C-3: 来世を信じない	28
I-2: 迷 信	C-1: 常に受け入れる	17
	C-2: たまに受け入れる	90
	C-3: 常に批判的	10
I-3: 肉親の死の瞬間に遭遇した体験	C-1: ある	83
	C-2: ない	34
I-4: 友人、知人の死の瞬間に遭遇した体験	C-1: ある	37
	C-2: ない	80
I-5: 死について親と話し合った経験	C-1: ある	51
	C-2: ない	66
I-6: 死について友人と話し合った経験	C-1: ある	48
	C-2: ない	69
I-7: 教育課程	C-1: 第一看護科1年	59
	C-2: 第二看護科1年	58
I-8: 脳死臨調答申の理解	C-1: 理解している	41
	C-2: どちらともいえない	24
	C-3: 理解していない	52
I-9: 脳死者からの心臓移植の成功率	C-1: 50%未満	78
	C-2: 50%以上	39
I-10: 脳死を人の死と認めるか否か	C-1: 認める	60
	C-2: どちらともいえない	41
	C-3: 認めない	16

分散しており一定の傾向はつかめない。それだけ、臓器移植に反対する思いは複雑だと考えられる。脳死の場合と同じく、保留の立場をとる学生ではその理由が「臓器移植を認める立場も、認めない立場も、両方理解できるから」に集中し、1N、2Nの合計で23.9%であった。

### 3. 諸要因の脳死に関する認識および臓器移植の賛否への寄与

脳死に関する認識および臓器移植の賛否それぞれの回答を外的基準とし、表3に示した要因（ただし、前者の回答にはI-10は除外）のかかわりを数量化理論第II類によって解析した。その結果は表4のとおりである。偏相関係数が比較的大きい値(0.1以上)を示し、寄与の度合いが大きいと判断した要因は、脳死に関する認識では4つの要因、臓器移植の賛否では7つの要因である。

それらの各要因について、各カテゴリーのスコアを示したのが図4および5である。スコアが正の値で絶対値が大きいカテゴリーほど、脳死に関する認識に対しては「死と認めない」立場に、臓器移植の賛否に関しては「反対」の立場に寄与し、逆に負の値では、前者に対しては「死と認める」立場に、後者に対しては「賛成」

表4 脳死に関する認識および臓器移植の賛否と各要因との偏相関

要 因	脳死に関する認識	臓器移植の賛否
信 仰	0.058 (0.575)	0.167 (0.656)
	迷 信	0.237 (2.399)
肉親の死の瞬間に遭遇した体験		0.020 (0.118)
友人、知人の死の瞬間に遭遇した体験	0.245 (1.515)	0.116 (0.328)
	死について親と話し合った経験	0.113 (0.597)
死について友人と話し合った経験	0.043 (0.233)	0.017 (0.042)
	教育課程	0.148 (0.774)
脳死臨調答申の理解	0.079 (0.471)	0.119 (0.332)
脳死者からの心臓移植の成功率	0.048 (0.266)	0.214 (0.549)
脳死を人の死と認めるか否か		0.574 (2.010)

注 ( )内の数字はレンジを示す

の立場に寄与することを示す。

まず、「信仰」についてみると、脳死に関する認識へは取り上げるほどのかかわりを認めることができなかった。臓器移植の賛否へのかかわりでは、「信仰する宗教がある」が「反対」の立場に寄与している。臓器を他人に提供したり、他人からもらうのは神仏の意思に反すると考えるのは当然と思われる。

「迷信」を信じるか否かは、脳死に関する認識へのかかわりでは「常に批判的」が「死と認める」立場に寄与しており、人の死を科学的に理解しようとする態度のあらわれのように思わ

れる。臓器移植の賛否へは取り上げるほどのかかわりは認められなかった。

「友人、知人の死の瞬間に遭遇した体験」の脳死に関する認識へのかかわりでは、「ある」が「死と認めない」立場に、「ない」が「死と認める」立場に寄与している。人の死の瞬間は衝撃的なものであり、遭遇した体験があると死を認めるのは少しでも先に延ばしたいと考えるようだ。一方、「肉親の死の瞬間に遭遇した体験」は脳死に関する認識に大きな寄与を示していない。この結果には疑問がもたれるが、村岡<sup>6)</sup>は看護学生の「脳死・臓器移植」観に対する意識調査の結果、学生が脳死・臓器移植に対してそれを身内の問題として意思決定を行う場合は家族の個別利害に応じて流動的に対応すると報告している。肉親の死の場合は家族とのかかわりのなかで人それぞれの複雑な思いが交錯している結果なのかもしれない。臓器移植の賛否への「肉親の死の瞬間に遭遇した体験」および「友人、知人の死の瞬間に遭遇した体験」のかかわりは同じであり、「ある」が「反対」の立場に、「ない」が「賛成」の立場に寄与している。死の瞬間に接すると、その身体から臓器を取り出すということは考えられないことなのだろう。

「死について親と、また友人と話し合った経験」の有無について、脳死に関する認識および臓器移植の賛否へのかかわりをみると、「親と話し合った経験」の有無だけが脳死に関する認識に寄与しており、経験が「ある」が「死と認めない」立場に、「ない」が「死と認める」立場に

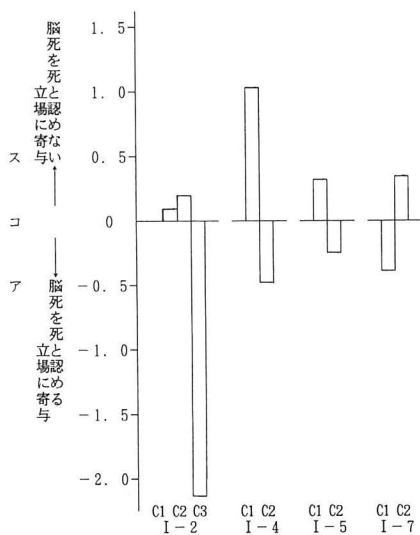


図4 脳死に関する認識への諸要因のかかわり

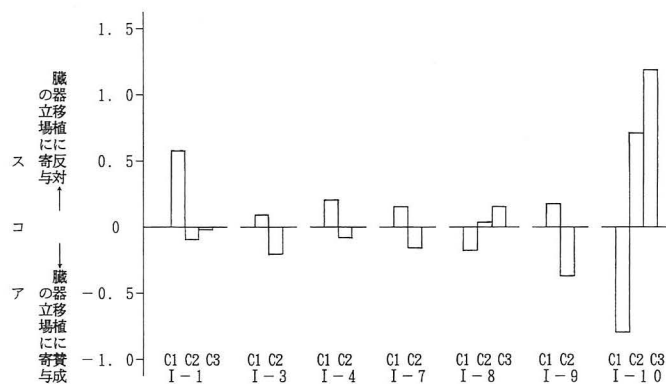


図5 脳死者からの臓器移植の賛否への諸要因のかかわり

寄与している。親との話し合いは、脳死を死と認めることに消極的な大人の意見<sup>5)</sup>の影響を受けているのかと想像される。

「教育課程」の違いについて、脳死に関する認識へのかかわりを見ると、1Nは「死と認める」に、2Nは「死と認めない」立場に寄与している。また、臓器移植の賛否へのかかわりでは、1Nは「反対」に、2Nは「賛成」の立場に寄与する属性となっている。2Nが脳死を「死と認めない」立場と臓器移植に「賛成」の立場に寄与するのは矛盾しているように思われるが、臨床実習で実際の患者に、またその家族に接したことがあると、いちがいに脳死に賛成とは割り切れなくなるであろうし、また延命医療を施したいとの思いになるのであろう。感情的な判断が優先している結果と思われる。

「脳死臨調答申の理解」は、脳死に関する認識へは取り上げるほどの寄与が認められなかった。一方、臓器移植の賛否へのかかわりでは、「理解している」が「賛成」の立場に、「理解していない」が「反対」の立場に寄与している。脳死・臓器移植容認の脳死臨調答申の内容から当然の結果である。ここで、その答申の理解が脳死に関する認識に寄与をもたない理由を推察すると、「理解している」と答えた学生もその関心は主として臓器移植の賛否に向いているというように思われる。

「脳死者からの心臓移植の成功率」をどのようにみているかについては、脳死に関する認識へは取り上げるほどのかかわりは認められなかった。臓器移植の賛否へのかかわりでは、「50%未満」が「反対」の立場に、「50%以上」が「賛成」の立場に寄与しており、当然と思える結果であった。

臓器移植の賛否への「脳死を人の死と認めるか否か」のかかわりを見ると、その度合は偏相関係数にみられるように、他の要因のそれに比して著しく大きく、脳死を「死と認める」が「賛成」の立場に、「死と認めない」が「反対」の立場に強く寄与する属性となっている。臓器移植を実施するためには、脳死が人の死と認められなければならないので、当然の結果と思われる。田代<sup>7)</sup>も、「脳死と臓器移植とは、それ自体としては多くの医療者が言うように別問題である。

しかし、両者を切り離して論ずることは現実的ではないし、また作為的であり、責任の回避にもなる。」と述べている。脳死と臓器移植は、現象とかひとつの治療方法の域にとどまるものではなく、人間の生命そのものの問題として考えるべきもので、看護学生が脳死と臓器移植を切り離して考えていないことが確認された。これは、「教育課程」の違いで認められた感情的判断と矛盾を生じるが、医学的に考えての判断と入り交じった状態なのではないかと考えられる。今後、看護教育の積み重ねがどのように学生の考え方に影響を与えていくのか、引き続き調査研究の必要性を感じた。

#### IV. おわりに

看護学生が入学時に「脳死と臓器移植」についてどのような認識を持ち、その形成にはどんな要因が寄与しているのかを報告した。

今回の結果を看護学生の生命観の育成に役立て、より教育が充実するよう努力していきたい。

さらに、今回の入学時の結果をふまえて、卒業時までの変化を継続的に調査研究していきたい。

#### 引用・参考文献

- 1) 渡邊ふみ子, 他: 看護学生の生命観に関する調査報告(第一報)―入学時の生命に対する考え方―, 川崎医療短期大学紀要, 8, 41-47, (1988)
- 2) 渡邊ふみ子, 他: 看護学生の生命観に関する調査報告(第二報), 川崎医療短期大学紀要, 9, 53-59, (1989)
- 3) 有馬 哲, 他: 多変量解析のはなし, 東京図書, 東京, (1990)
- 4) 山陽新聞: 問われる死―脳死と臓器移植―, 1992.1.21
- 5) 金阪圭伊子, 他: 青少年における生命の倫理観に関する調査, 学校保健研究, 31(10), 495-499, (1989)
- 6) 村岡 潔: 看護学生の流動的「脳死・臓器移植」観―特に、意思決定を左右する家族のファクターについて―, 日本保健医療行動科学会年報, 6, 75-91, (1991)
- 7) 田代俊孝: 脳死・臓器移植を考える, 同朋舎出版, 東京, (1992)
- 8) 今川文子, 他: 専門学科学学生の脳死・臓器移植に対する意識・態度に関する研究, 学校保健研究, 34(3), 121-134, (1992)